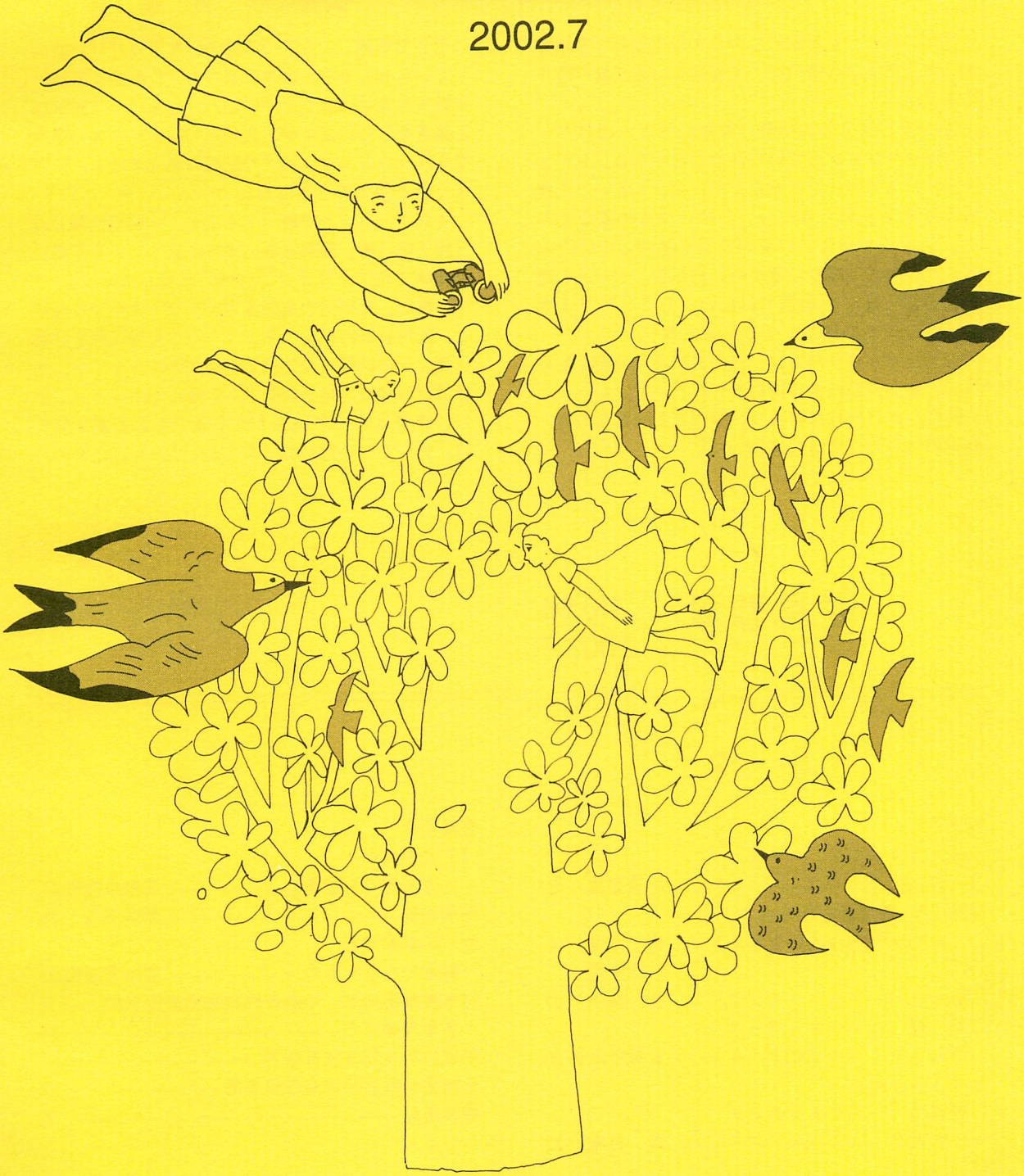
66号

愛鳥教育

2002.7



全国愛鳥教育研究会

巻頭言

リュウキュウツバメから学ぶこと

会長　杉浦嘉雄

昨年の暮れ、私が勤めている大分市郊外に立地する日本文理大学の構内に、大変珍しい客が舞い降りてきた。

2001年12月７日の早朝、学生たちと一緒にバードウォッチングをしていた時のことである。シジュウカラ、スズメ、ハクセキレイ、ツグミといった身近な留鳥や冬鳥たち……。このいつもの顔なじみに、リュウキュウツバメが６羽も混ざっていたのだ。九州の冬は確かに暖かい。それ故、ツバメの越冬はさほど珍しい現象ではない。しかし、リュウキュウツバメの越冬となると話は違う。

リュウキュウツバメは、その名の通り沖縄はもちろん、奄美大島以南の留鳥とされている。ツバメとの識別も比較的容易であり、確信はあったものの、発見時はやはり我が目を疑った。

そこで早速、“大分市の野鳥”をライフワークにしていらっしゃる、日本野鳥の会大分県副支部長の宇野久生先生におうかがいした。先生は、「30年以上調査をしていますが、大分市のみならず大分県内でもリュウキュウツバメの記録はありません。」とすぐさま答えて下さった。

インターネットで調べてみると、一部の情報では「種子島以南、沖縄諸島に周年生息している留鳥」（琉球文化アーカイブ、1999）となっていた。

さらに、九州内の鳥関係ネットワークをフル活用し、九州各県のリュウキュウツバメ目撃情報を収集した。その結果、大分以北の福岡県はもとより、大分以南の宮崎、熊本両県でも記録はなかった。しかし、鹿児島県の九州本土最南端である大隅半島では、大分での発見以前に非公式ながら記録があると

愛鳥教育　No.66
2002.7

目　次

巻頭言
リュウキュウツバメから学ぶこと ---------- 杉浦嘉雄　2
『第２回 環境教育研修会 in YOKOHAMA』テキスト ---- 堤　達俊　4
三枝秀明
「とやまバードウォッチング」 ---- 林　梅夫　17
「第１回　ジャパン　バードフェスティバル2001」 ---------- 箕輪多津男 20
もりまき通信(16)
映画でバードウォッチング その２ ---------- 森　真希　22
書籍紹介
『これがカモ！ カモ何でも図鑑』 ---------- 箕輪多津男 25
四季旬報 ---------- 渥美守久　26
竹　～草本でも 樹木でもないもの～ ---------- 箕輪多津男 32
村本義雄顧問が、中国野性動物保護協会の名誉理事に！ ---------- 34
平成13年度収支決算報告 ---------- 37
全国愛鳥教育研究会役員名簿 ---------- 37
編集後記 ---------- 38

いう情報を得ることができた。

ここまでの情報を総合すると、リュウキュウツバメの分布域としての北限（留鳥としての北限ではないが）はここ数年の間に、奄美諸島から種子島、大隅半島を経て大分まで北上してきたことになる。

さて、その原因は何だろうか？　様々な要因が考えられるが、私には、“地球温暖化のシグナル”を琉球からの使者が運んできたように思われてならない。

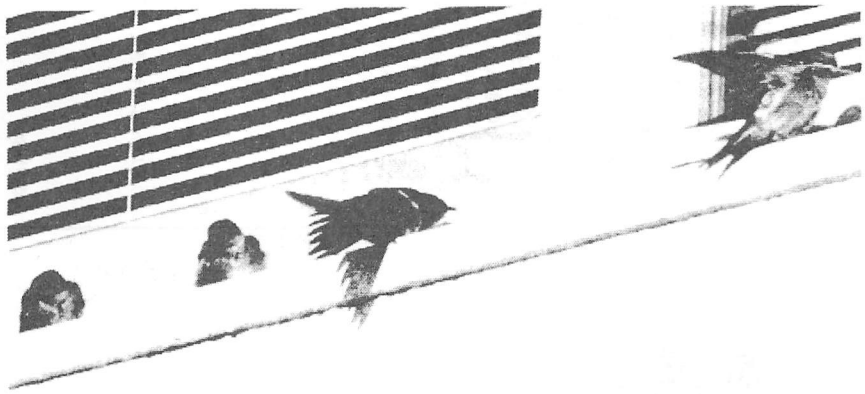
実際、大分のこの年一年間の年平均気温は、観測史上３番目の暑さを記録した。観察期間中［2001年12月７日（６羽）～2002年３月22日（２羽）］、大学構内でも一番日当たりの良い校舎の窓辺で暖をとり、真冬でも草地からわき出る虫たちを飛びながら捕食していた。小春日和続きのようであった大分の冬は、まさに“沖縄の微気象”が大分に進出してきたかのようだった。

一時的な現象のみでの即断は禁物であるが、愛鳥教育に携わる者として野鳥からのメッセージを蔑ろにするわけにはいかない。

リュウキュウツバメが私たちに伝えたかったこと。その正確な答えを、これからも彼らから学んでいきたい。

平成13（2001）年12月31日　月曜日　大分合同新聞（朝刊）

窓枠でひなたぼっこをするリュウキュウツバメ（日本文理大学）



リュウキュウツバメ飛来

文理大に県内初

「寒さに負けるなョ」

十二月に入り、日本文理大学キャンパス内（大分市・木）に、国内では鹿児島県奄美大島以南の南西諸島にしかいないリュウキュウツバメが飛来している。九州で冬を越すツバメ（越冬ツバメ）は各地で確認されているが、リュウキュウツバメが県内で観察されたのは初めて。

発見したのは、同大学助教授で日本鳥獣保護連盟専門委員、全国愛鳥教育研究会会長の杉浦嘉雄さん。今月に入り、キャンパス内でツバメが飛んでいるのを確認。最初は越冬ツバメと思っていたが、学生とともに識別すると、のどが赤黒く、燕尾（えんび）は短い。おなかも黒っぽく、リュウキュウツバメの特徴と一致した。当初は六羽、二十日には四羽を確認し

日本野鳥の会県支部の宇野久生・大分支部長は「大分市内では初めてだろう」。県内でも初めてだろうが、杉浦さんが、鹿児島県などの野鳥関係者に問い合わせると、近年は同県の種子島や大隅半島でも確認されており、北上が始まっているのは確かなようだという。

杉浦さんは「リュウキュウツバメを観察できてうれしいが、冬というのが心配だ。鹿児島の例もあるように、本来南にいるはずの種が北上しているのは、地球温暖化のシグナルではないか。しかし、大分の冬を越すことができるのだろうか」と話している。

体験学習に役立つ！
総合的な学習のネタに！

第２回 環境教育研修会 in YOKOHAMA

横浜の原風景を生かした
環境教育プログラムの
実践をしてみませんか？

◎日　　時　平成１３年5月２６日（土）９：３０～１４：３０

◎場　　所　こども自然公園

◎参 加 費　５００円（保険料・資料代等）

◎主　　催　全国愛鳥教育研究会
［事務局：東京都杉並区和田3-54-5　（財）日本鳥類保護連盟内］

1　ドバトに学ぶ恋のテクニック

◎ドバトの求愛行動を観察しよう

○１年を通して繁殖
ドバトは１年中繁殖をしています。その秘密はピジョンミルク。

○　いろいろな求愛行動をチェック！
- □　首筋を膨らませ、虹色に光る羽毛を目立たせる。
- □　尾羽を下げ気味に広げる。
- □　頭を前後に振る。
- □　クックーなどと低い声で鳴く。
- □　雌の周りを歩き回る。（木の上ならどうする？）
- □　嘴で相手の首筋や頭の羽毛をつくろう
- □　その他（　　）

○　ドバトから学んだ恋のテクニック
『　　』

○　一方、ドバトをよく見てみれば・・・悲しい現実も。

○ドバトはなぜ増える？

［関連団体］
- ・（財）日本鳥類保護連盟（０３－５３７８－５６９１）・・・テグスキャンペーン
- ・日本ハトレース協会（０３－３８２２－４２３１）・・・「JPN」の刻印
- ・日本伝書鳩協会（０３－３８２０－４１１３）・・・・「NIPPON」の刻印

［参考文献］
- ・「バードウオッチング入門」　浜口　哲一　著・文一総合出版・１６００円
- ・「自然ガイドとり」浜口　哲一　文・佐野　裕彦　絵・文一総合出版・１５００円

2　隙ありっ！名漁師ダイサギの不思議な動き

◎ダイサギの採餌行動を観察しよう

○採餌方法のいろいろ

- □　浅い水中で魚を追いかけ回してつかまえる。
- □　じっと待ち伏せして近づいてくる魚を一瞬にして捕らえる。
- □　水中で足を蓄わせ、魚を追い出して捕まえる。
- □　翼を広げて影を作って魚を捕らえる。

さて、どんなテクニックを見せてくれるでしょうか？

[参考文献]バードウオッチング入門：浜口哲一著（文一総合出版）

3　池の困り者　「ミシシッピアカミミガメ」

◎一見、コイやカメが泳ぐのどかな池に見えますが・・・。

小さい頃はミドリガメという通称にふさわしい緑色

大きくなると黒ずんでくる、ミシシッピアカミミガメという本名に納得

○　最初に日本に持ち込まれたのは、大手お菓子メーカーの懸賞の賞品だったらしい。それがブームとなって大量に輸入されるようになったのですが、サルモネラ菌騒動があり、子どもが触っても、手を洗わないまま食事をしてしまう懸念から、多くの保護者が池などにカメを捨てたことによって今ではどの池でも見られるようになってしまった・・・。最初はかわいい緑色だが、だんだんと黒くなってしまうのも捨てられる原因の一つらしい。その結果・・・。なぜ、ペットを捨てるといけないのでしょうか。

○　身近な池や川に困り者はいませんか？

4　最近　あまり話題にならなくなりましたが・・・

◎　今の時期、唯一の野生のカモ、カルガモを観察しよう。

○　一時話題沸騰したカルガモ君。カモといえば普通、冬に北の国からやってくるものなのですが、このカモだけは、１年中どこにでも？います。雄と雌が同じ色というのもこのカモだけ。どこでも見られますが、考えるとかなりの変わり者かもしれません。

・留鳥・・・１年中日本にいる野鳥
・夏鳥・・・夏になると繁殖のため、南国から日本にやってくる野鳥
・冬鳥・・・冬になると越冬のため、北国から日本にやってくる野鳥
・漂鳥・・・季節によって国内で住む場所を移動する野鳥

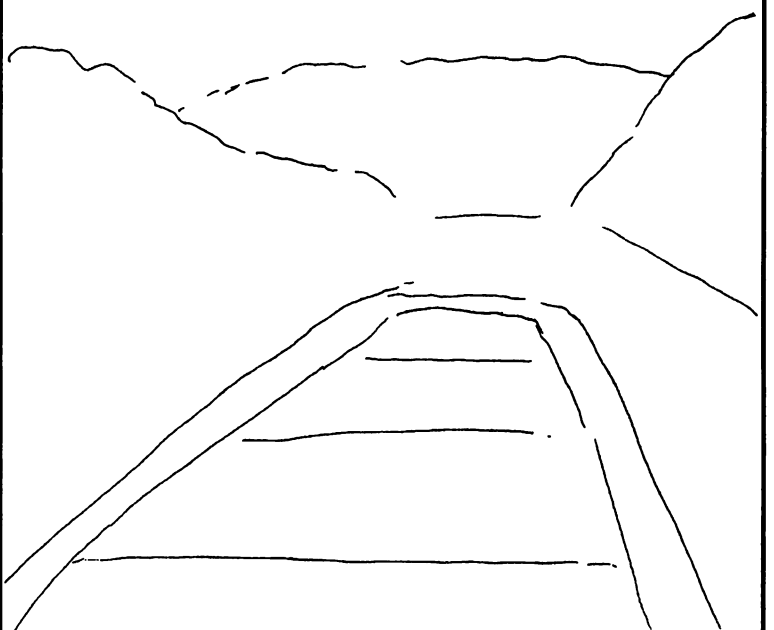
○　カルガモをよく見てスケッチしてみよう。描くことによって、細かいところまで見ることができます。

5　谷戸田は横浜の原風景だ！

◎谷戸田の様子を見てみよう

横浜は東西に川が流れ、そこの谷戸には田んぼが広がっています。
子ども自然公園は帷子川の源流の一つ。横浜の原風景とも言える谷戸田の様子が見られます。

○気付いたことをメモしてみましょう。

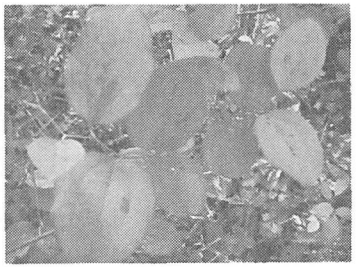


○横浜に「谷戸」の地名がついたところがいくつもあります。もともとはこんな風景の場所だったことがわかると、まちの見方が変わるでしょう。
○谷戸の平らなところを田んぼにし、両脇に水路を切る農法は弥生時代にも行われていたようです。

6　気をつけよう！危険な生物

◎　身近なところに意外と多いよ！きちんと覚えて安心指導

タケニグサ：全草［神経マヒ］



サルトリイバラ：茎のとげ

ケキツネノボタン：全草（特に花）［腹痛・下痢・瞳孔の散大］

オニノゲシ：葉のとげ

ヌルデ：全草［水疱性炎症］

ウルシ：全草「水疱性炎症」

○その他、アズマヒキガエル、ニホンアマガエル、ヘビ類、スズメバチ類に気をつけよう

7　さびと油！不法投棄か？

◎水の中の「さび」はなんだろう！

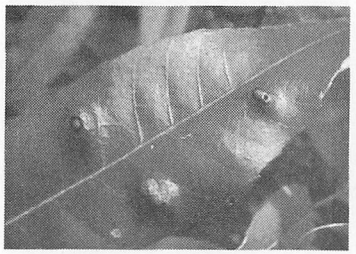
水の中に赤錆のようなものが見られます。そこには油のような幕も浮いています。一体これはなんでしょう。誰かが石油缶を捨てたのでしょうか？

○　これは鉄バクテリアと言われる微生物です。湧き水の中の鉄を分解するエネルギーで生きています。油のような幕はこのバクテリアの死骸なのです。鉄分の多い湧き水が出ているとこに見られます。鉄ですから、さび臭いにおいがします。勇気を出して触ったり、臭いをかいだりしてみましょう。

○　鉄バクテリアには、鉄をさびさせる困ったやつ？、鉄やマンガンを取り除く役に立つやつ？など、インターネットで調べたらいろいろ出ていました。「鉄バクテリア」または、「鉄」と「バクテリア」の二つのキーワードで検索してみましょう。

8　何かの病気なのかな？

◎　葉っぱや枝に付いたボツボツ。身近な植物にいっぱいあります。でも病気でこうなったのではありません。一体なんの仕業でしょう。



シラカシ

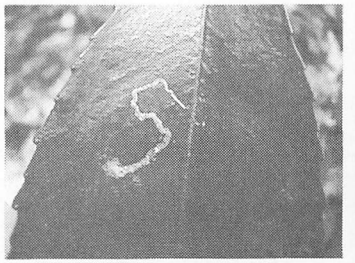
ツゲ

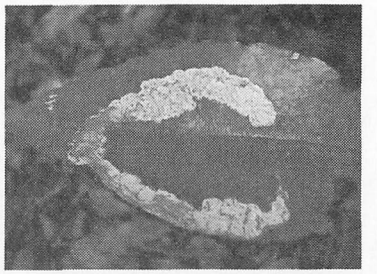
○割って中を見てみよう。中に何かいるかな？

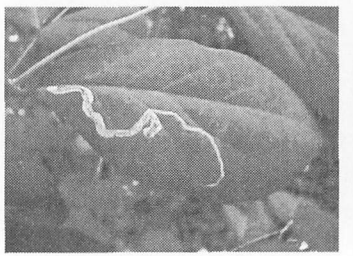
[参考文献]
・「虫こぶはひみつのかくれが？」　湯川　淳一　文・松岡　達英　絵
（たくさんのふしぎ第８６号）福音館書店

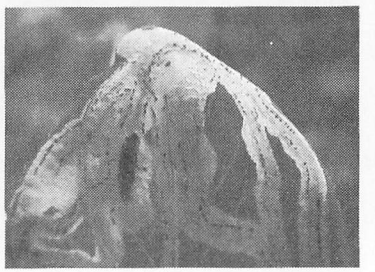
9　謎のメッセージを解読せよ！

◎葉っぱの上に残された謎のメッセージ。一体何これ？







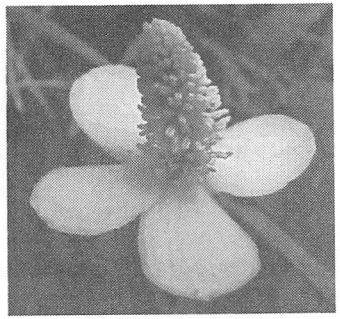


○　よく見てみれば、中に何かいます。通称「字書き虫」。ルーペで覗いてみましょう。小さな点々はなんでしょうか。

１０　自然の香りを楽しもう！

◎　あなたのお好みの香りはどれ？自分の鼻でなんの植物かわかる？

クサギ：秋になるとな宝石
のような実ができます



ドクダミ：みなさんご存じですね。

クロモジの花：春先に咲いていました。

○その他にもサンショウ・シロダモなどがあります。

１１　ゲンジボタルの愛の語らいを邪魔しないで！

◎　今年もそろそろやってくる。淡い光のイベントが。

○　観察するときのポイント

・ホタルは光を点滅させ、繁殖活動を行います。よって、懐中電灯はなるべく使用しないようにしましょう。車のハザードランプも厳禁。

・ホタルのいる田んぼの畦はホタルがさなぎになる場所です。入り込まないようにしましょう。

・ホタルは飛ぶことが苦手なのですぐに疲れて休みます。そこで一晩中飛び回るのではなく、よく飛ぶ時間とあまり飛ばない時間ができます。これがホタル時計です。

　夕暮れとともにぼちぼち飛びはじめ、午後８時～９時が第１のピーク、次が１１時ごろ、そして真夜中の１時～２時ごろで、露が降りはじめると飛ぶのを止めて、夜明けとともに草かげに姿を消すのです。飛んでいないときは、草や木の葉に止まって淡い光を放ちながら休んでいます。また、毎晩時間が来ると飛ぶというわけではなく、月夜の晩や気温の低いとき、雨の晩などはおやすみです。しかし、なかなかこんな条件の整った夜はなく『乱舞』を見るチャンスはめったにありません。

［関連サイト］

・河合の宝「ゲンジボタル」

http://www2.gol.com/users/nekopapa/hotaru/genji-33.htm#ho-363

１２　２つのカラス

◎　身近なカラスには２種類いるって知ってた？

・ハシブトガラス
もともと山の中にすむカラス。最近都会で問題になることが多い。「カーカー」と鳴く。

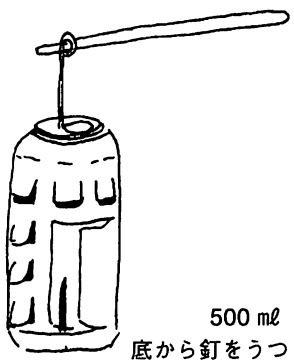
・ハシボソガラス
農耕地に多いカラス。畑を荒らすのはこのカラス。「ガアガア」と鳴く。

○　さて、これは何ガラス？
「七つの子」野口雨情
からす　なぜなくの　　からすは山に　　かわいい七つの　　子があるからよ
かわい　かわいと　　からすは　なくの　　かわい　かわいと　なくんだよ
山の古巣に　いって見てごらん　　丸い目をしたいい子だよ

１３　知らなかった！夜がこんなにくらいとは！

◎真っ暗体験をしよう！
住宅地の真ん中にあるこども自然公園ですが、木々に囲まれ足元が見えないくらいの闇が体験できます。
足元は真っ暗ですが、木々の間から見られるうっすら明るい空とそこで瞬く星の美しさに感激することでしょう。

○　アルミ缶などを利用してカンデラを作って持っていきましょう。ろうそくは一人一本にしましょう。



500 mℓ
底から釘をうつ

○　ろうそくが消える頃にはきっと目が闇になれているはず。何が見えますか？何が聞こえますか？感性を研ぎ澄ませて見ましょう。

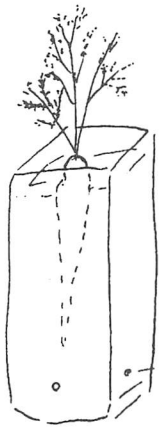
＊子どもたちだけのナイトウォークは不安です。応援の先生方に、一グループ一人ずつついてもらいましょう。
＊道に迷わないよう注意しましょう。もし迷ったら、一度公園の外に出てしまうとよいでしょう。周りは、住宅地ですから・・・。

１４　自分が育てた野菜でカレーを作ろう！

◎自分が育てた野菜でカレーを作ろう！

体験学習でのカレー作りも自分たちで育てた野菜を使えば意味が変わってきます。
学校で野菜を栽培し、体験学習にもっていこう！
学級花壇が理科の教材で使えなくても、ニンジンやジャガイモは簡単に栽培できます。
総合学習への発展も可能です。

○ペットボトルでニンジンを育てよう



ニンジンは「時なし」を選ぶ。
大きさは三寸のもので、ややこぶりのニンジンしかできないが、切らずにそのまま煮込むことができる。

２リットルのペットボトルに、腐葉土をたっぷり入れた黒土。
肥料を入れれば完璧。

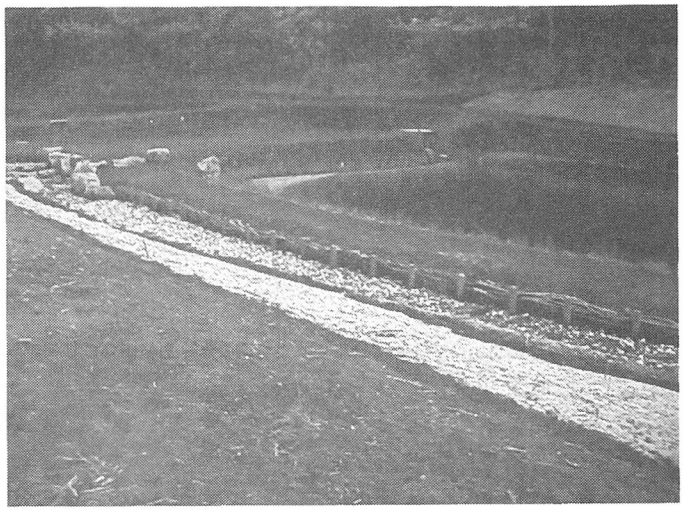
水抜きの穴をあける。

○米袋でジャガイモを育てよう

１０kgの米袋に腐葉土と黒土を入れる。
袋を二重にすればより丈夫。
下の方に水抜きの穴をあける。
肥料を入れよう。
日当たりが少し悪くても十分イモはできる。

１５　近自然工法を学校ビオトープに取り入れてみよう

◎水路をよく見てみましょう。何か工夫がされています。



○気づいた工夫

１６　雑木林のいろんなお話

◎どうして雑木林の木ってたこ足状態なの？

○最近、雑木林にシュロが増えてるんだって。どうしてだろう？

○　ところで、昔話によく出てくる「おばあさんは川へ洗濯に、おじいさんは山へ『しばかり』に」っていう言葉。「しば」って一体なんでしょう？？？

１７　土の生い立ちを探ろう！

◎葉っぱは落ちて土になる。葉っぱが土になる様子を観察しよう。

○落ち葉の下を見てみよう。

○どこまで掘れば土になる？

○落ち葉を食べる虫、落ち葉を栄養にする生物、落ち葉の中はいろんな生物の宝庫だ！

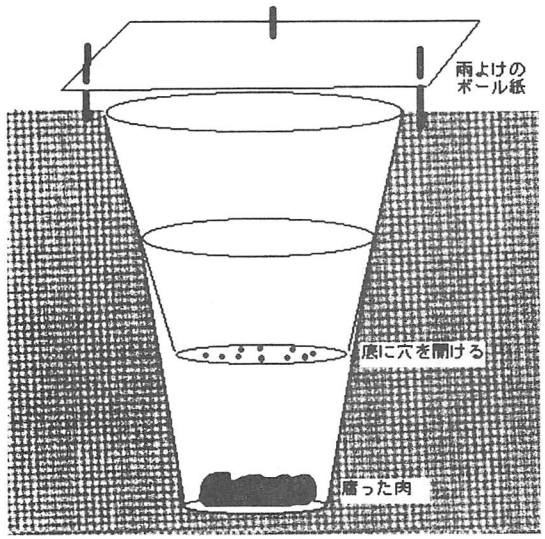
１８　森の掃除屋さん、素顔を見せて・・・。

◎　なぜ、動物の死体を見る機会があまり多くないか？

○森の掃除屋さん的存在であるシデムシやオサムシの仲間に会いに行こう。

［用意する物］・腐った肉、プラスチックコップ（大・小）、ボール紙、シャベル

［やり方］下図のような装置（ベイトトラップ）を地面に埋めておく。すると、腐肉の臭いによって様々な昆虫がおびき寄せられる。その数や種類を記録



［留意点］

・ベイトトラップは必ず回収すること。トラップのかけっぱなしは厳禁。
・肉はしっかり腐らせておかないと、ネコなどに掘り返されてしまう。
・エサは肉に限らない。いろいろ試してみよう。

［参考文献］

・指標生物　（財）日本自然保護協会　編

１９　明るい森と　暗い森。　どっちが好き？

◎見上げたときの明るさを観点に森を見てみよう！

○見上げたときの明るさの違いを感じがわかります？
明るさに違いはなんでしょう？木の様子を見てみましょう

○明るい森と、暗い森の中はどうなっているでしょう？
林床の様子の違いを見てみましょう

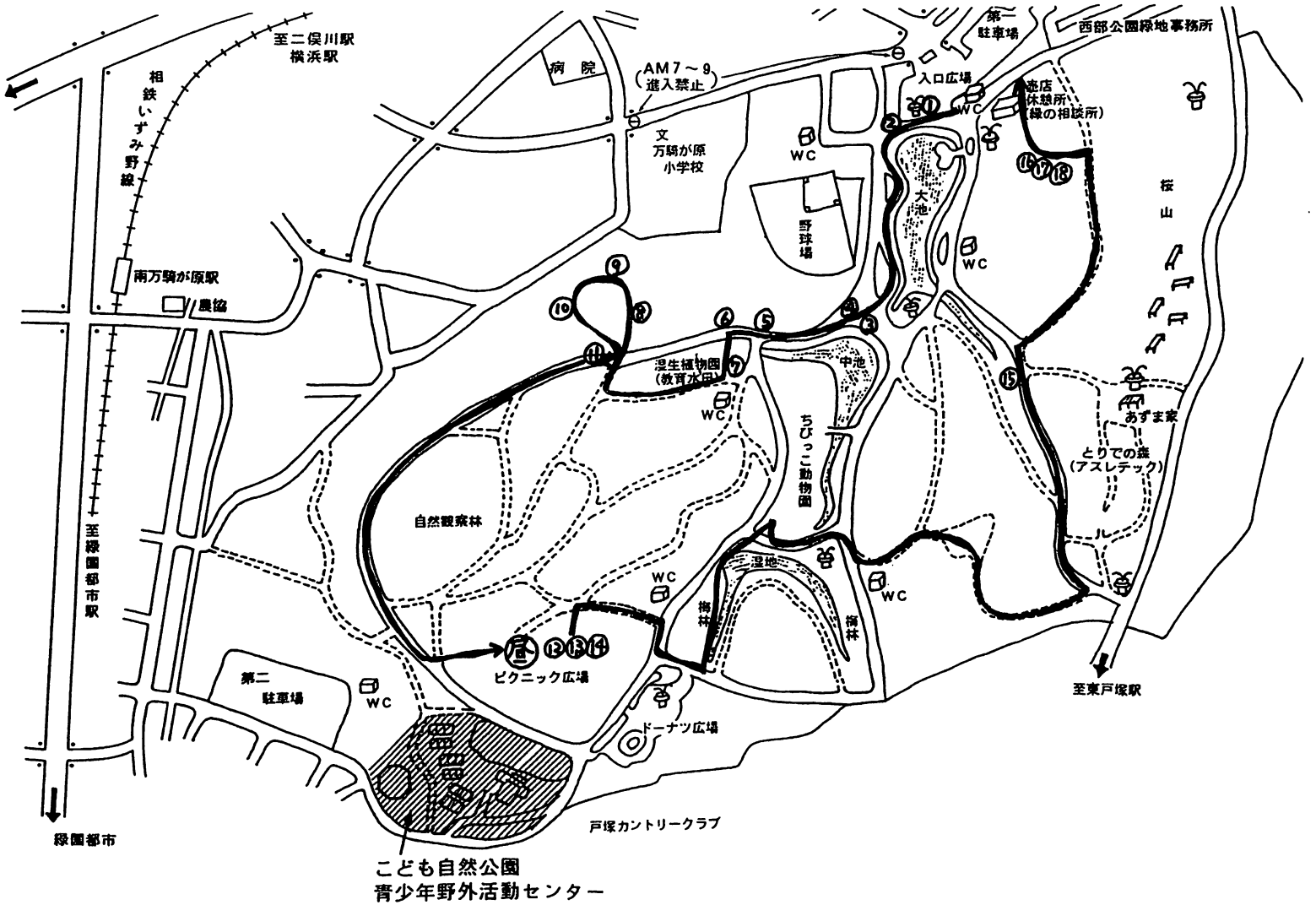
あなたが人間以外の動物だったら、どっちの森に住みたいですか？いろいろな動物になったつもりで考えてみましょう。

体験学習　日程実施例

第１日目

時刻	行程	活動内容	
8：30	学校集合	○クラスごとに整列する。	
8：35	出発式	・　出席人数調べ・健康観察	
9：00	バス乗車	・　バス乗車中の注意　・見学場所の説明	
10：00	見学場所到着	＊　見学場所は学習内容と環境が関連した施設を選定すると良い。 ・浄水場　・下水処理場　・清掃工場 ＊　環境関係の施設を利用するのもよい。 ・環境エネルギー館	
11：00	見学場所発		
11：30	大池公園着	○昼食 ＊　昼食は見学場所でとっても、公園に到着してからでも良い。見学場所と時程によって決める。 ＊　公園内で食事なら、食後にトラップを仕掛ける。	
12：30	入所式	司会（センターの人） ◎センターの人にあいさつ ②センター所長の話 ⑧施設利用の諸注意 ◎児童代表のあいさつ ◎今後の時程について	
13：00	荷物整理 避難訓練	○宿泊棟に入り、荷物など整理 ・　宿泊棟での注意	
13：30	夕食準備	○グループごとに夕飯の準備をする ・買い物出発 ＊　南万騎が原駅まで約１０分。駅前スーパーや商店で買い物ができる。自分たちで計画し、買い物をするのも有意義な活動である。	
15：00	炊飯場所で調理 調理開始	○炊飯の材料や道具の確認をして炊飯開始 ・火の扱いに注意し、自分たちで食事の準備をする。 ＊　市内の地の利を生かし、終業後、他学年の先生方にも応援に来てもらい食事の準備に関わってもらう。	
17：00	夕食・後かたづけ	○食事　・　片付け	
18：45	キャンドルファイヤー	○キャンドルファイヤー ＊　ネーチャーゲーム的な内容を盛り込むと良い。	
19：50	ナイトウォーキング出発	○ナイトウォーキング ＊　カンデラをもって出発！ろうそくは一人一本。 ＊　野外活動センター近くにトラップを仕掛ける。 ＊　グループに一人ずつ応援に来てくれた先生についてもらうと安全。 ＊　街灯のない道を選んで歩く。目が慣れるといろいろなものが見えてきて不安がなくなる。	
20：45	集合		
21：00	入浴	○人数確認・報告	
21：45	就寝準備・就寝	○　就寝準備	

第２日目			
時刻	行程	活動内容	
6:00	起床	○ふとん・シーツの整理。○着替え・洗面	
7：00	朝食づくり	○炊事場でかんたんな調理をする。	
	朝食	＊ カートンドッグをやる学校が多いと聞くが、牛乳パックのコーティングまで燃やすので不安が残る。	
8：00	荷物整理	○部屋の荷物を整理して集会場に運んでおく。	
	掃除	○分担した場所の掃除をする。	
9：20	自由活動	○きのうしかけたトラップを見に行こう。 （活動グループ） ＊ 昼食時、ナイトウォーキングで仕掛けたトラップを回収する。捕まえた生き物は、観察してその場に返す。トラップを残さないよう、回収した容器の数を確認する。	
10：00		○選択行動グループで遊ぼう。 （活動グループ別） ・水辺のスケッチ　・桜山探検隊　・ムシムシ発見隊 ・アスレチック　ネィチャーオリエンテーリング ＊ 事前に活動できる内容を紹介してから計画を立てると、活動内容が広がる。環境教育研修を参考に！ ＊ 植物・昆虫の採集は西部公園緑地事務所（こども自然公園内）に申し出て許可を得る必要がある。生物調査やビオトープの材料など意味があるものでないと許可にならない。原則は採集禁止。	
11：30	本部前集合	○クラスごとに人数を確認する。	
11：45	昼食	○グループごとに弁当を受け取り食べる。 ＊ 弁当がらの始末や、残り物の始末を考えることから、人間の生活を考えるよい機会となる。	
12：30	退所式	司会（センターの人） ◎センターの人のあいさつ ②お礼の言葉 ◎今後の時程について	
13：30	大池公園発	○バスに乗り帰る。 ・人員確認	
14：30	学校到着	○グループごとに整列しよう。	
14：40	到着式	○元気よくあいさつをしよう。・健康観察	
14：50	解散	○地区ごとにまとまって下校する。	


至二俣川駅
横浜駅
相鉄いずみ野線
南万騎が原駅
農協
至緑園都市駅
緑園都市
病院
(AM7～9)
進入禁止
文
万騎が原
小学校
野球場
WC
第一
駐車場
西部公園緑地事務所
入口広場
売店
休憩所
(緑の相談所)
大池
中池
桜山
あずま家
とりでの森
(アスレテック)
湿生植物園
(教育水田)
ちびっこ動物園
自然観察林
湿地
梅林
ピクニック広場
第二
駐車場
ドーナツ広場
戸塚カントリークラブ
至東戸塚駅
こども自然公園
青少年野外活動センター

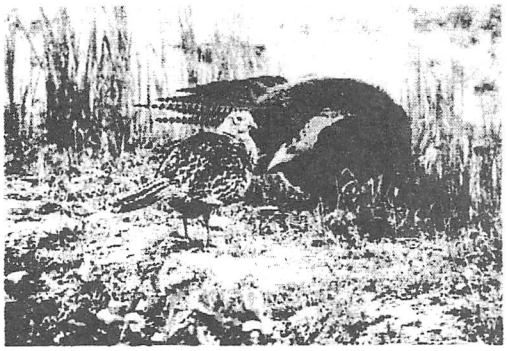
「とやまバードウォッチング」

理事　林　梅夫

※　前号に続き、月刊誌『富山県人』〔㈱富山県人社発行〕に掲載されました「とやまバードウォッチング」のシリーズの後半（⑦～⑫）を、著者ならびに出版社の許可を得て、転載いたします。

とやまバードウォッチング ⑦

国鳥　キジ



茶の間から撮った春のひとこま

キジ（雉）の雄は美しく立派で風格がある。雌もまた「焼け野の雉子（きぎす）、夜の鶴」でも知られるように、母性愛の強いことで知られる。（きぎすは雉の古名）

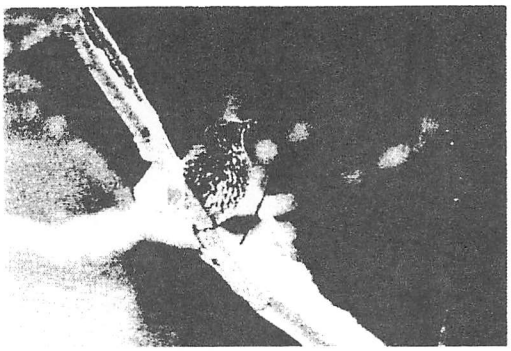
日本だけの種であることもあって、国鳥となっている。

県内の平野のどこにでも棲むが、草付きで抱卵中の雌が草刈機にかかったり、地上を駆ける雛がU字溝にはまって流され溺死する例も少なくない。雄もハンターのゲームの的になることもあって、近年、いちじるしく生息環境が悪化した不運な野鳥である。

（ビオトープアドバイザー・林　梅夫）

とやまバードウォッチング ⑧

緑の伝播に貢献する ヒヨドリ



ミカンを食べに来たヒヨドリ

県内の大きな河川の流域に広がる扇状地形は見事な散居を展開する。ヒヨドリはこの散居の林から林へ、木立から木立へ飛び交い木の実や虫を食べる。その糞の中に、運ばれて来た種子がある。やがて芽吹く木もあり、緑の伝播によく貢献することになる。

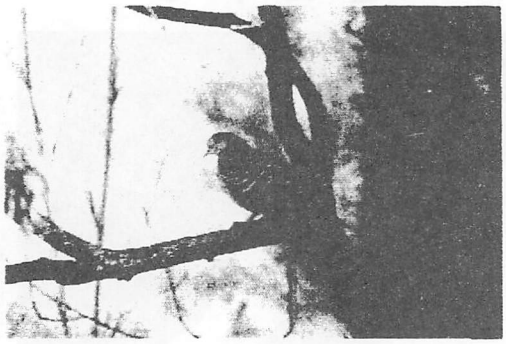
繁殖は主として里山で行い、木の枝股に巣をかける。体はスズメの３倍くらい、頭の羽毛は柳葉状でヒーヨヒーヨと鳴きながら波状に飛ぶ。遠くからでもよくわかる鳥である。

散居で有名な砺波市はこの鳥を「市鳥」として大切にしている。

（ビオトープアドバイザー・林　梅夫）

とやまバードウォッチング ⑨

人の身近に巣作りする
キジバト



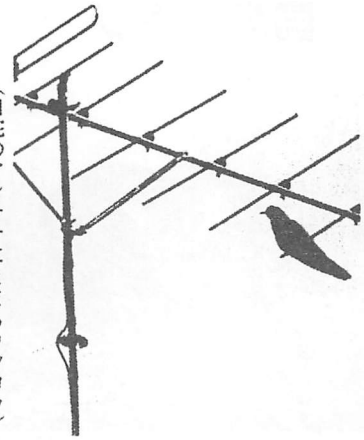
お寺や駅構内に見る鳩(ドバト)に形や大きさも似るが、胸はブドウ色、背は茶色の鱗状模様、首に青いしま状の斑、一見キジの雌の色に似ている。いつも同じ林の周辺で５～６羽の群れで生活している。

繁殖期には、雄は「デテッポッポー、デテッポッポ」とのどかに繰り返す。子供の頃「デテッポッポウ、蓑笠もってこい」と天候悪変のきざしとした。この時期にはまた、雄は林の中から高く飛び立ち、羽ばたきを止め、弧をえがいて林の中に消える。これは鷹の擬態であろうともいわれている。

年に２～３回の子育てをするが、近頃、抱卵中の２個の卵もカラスに狙われるので、人の身近な木の枝に巣作りをするよう知恵を働かせているようである。　　（ビオトープアドバイザー・林　梅夫）

とやまバードウォッチング ⑩

夏鳥 カッコウ



（自宅のアンテナにとまるカッコウ）

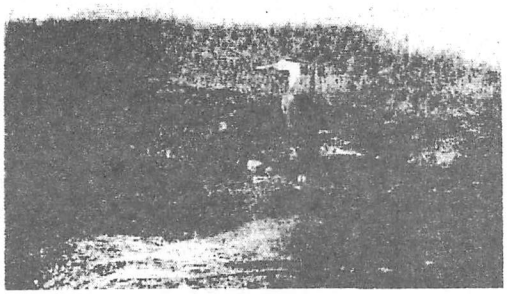
日本に夏鳥として渡って来るホトトギスの仲間は４種（カッコウ、ツツドリ、ジュウイチ、ホトトギス）。どれも鳴き方が名前になっているから面白い。

カッコウは５月下旬頃から砺波の里でも盛んに鳴く。昭和30年頃までは県内でも山麓地の限られたところで繁殖していたが、近年平野部にも生活圏を拡大した鳥である。この鳥は托卵により子育てをする。砺波の里ではどの鳥に托卵しているのか話題にのぼる。私はモズかオナガの巣に托卵しているのではないかと想像している。

鳩を細くしたような体で、翼は鷹状の横斑がある。この鳥が鳴くと夏になったと季節を感じるのである。
（ビオトープアドバイザー・林　梅夫）

とやまバードウォッチング ⑪

サギの中で最も大型の
アオサギ



日本には18種のサギの仲間がいる。その中でもアオサギは際立って大型である。長いＳ字形の首、鋭く長い嘴、水の中に立つための長い足が特徴である。

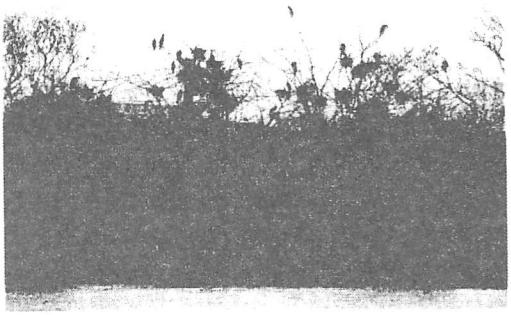
粉綿羽という変わった羽が胸部、腰、腿の裏側にあり、魚や蛙等を食べた時、羽についた粘液を取り除くのに使われる。嘴でこの粉を汚れたところにつけ、汚れを吸い取らせて足の指でかき落とすのである。

近年このアオサギのコロニー（集団営巣）がよく見られる。神社の杜あるいは今までカラスの塒であった森に侵入した例もある。このため運んできた生魚が下に散乱し、また風等で落ちた雛鳥は救助しないこの鳥の習性から、悪臭やハエ等で不衛生となる。ここにも人との共存問題が起きている。

（ビオトープアドバイザー・林　梅夫）

とやまバードウォッチング ⑫

庄川中州に営巣する
カワウ



庄川にかかる旧国道８号線の大橋の下流約１kmあたりの中州に、今多くのカワウたちが巣を懸けている。ここは彼等の塒でもある。この集団営巣を作ったのはごく最近のことで10年もたっていない。県内では15年ほど前から急に増えた鳥である。それまではウミウに混じって海岸で少し見られたものだ。

近年神通川や庄川でサケやアユの稚魚の放流に害を与えている。カラスより大きく、全身黒褐色で羽根は黒緑色。足の指４本の間に膜が発達し水かきとなっている。泳ぎも潜水も上手で魚を大量に食べる。

砺波地方では散居の空高く雁のように竿になり、鉤になり、100羽前後の群れが庄川や神通川へと行き交う姿が見られる。　［完］

（ビオトープアドバイザー・林　梅夫）

日本における鳥をテーマにした一大イベントのスタート

～「第１回　ジャパン　バードフェスティバル　２００１」参加報告～

事務局　箕　輪　多津男

平成13年11月17日（土）～18日（日）に開催された標記のフェスティバルに、後援団体として参加いたしました。当日は天候にも恵まれ、青空のもとどの会場も大勢の参加者でにぎわいました。（ちなみに、フェスティバルののべ参加人数は約37,000人ということでした。）

当研究会の参加内容としては、手賀沼親水広場に特設されたテントにおけるブース展示、および子供たちを主な対象とした工作教室の開催という形式を取りました。

①ブース展示

ＮＧＯ関連のコーナーにおいて、テントの両面を使わせていただき、当研究会がこれまでに行ってきた研修会や観察会等のイベントの紹介、およびその際に使用した教材の抜き刷り（拡大版）等をポスターの形で展示し、同時に活動案内の配布、および閲覧用として会報誌『愛鳥教育』のバックナンバーの配置を行いました。

また一部の時間帯ではありましたが、当研究会の事務局あるいは役員がブースの前に立ち、見学に訪れる方々に対して活動の内容や主旨等について解説を行いました。ブースに張りつくことができた時間帯が少なかったため、来訪者の反応につきましては十分につかむことはできませんでしたが、パンフレット類についてはかなり捌けましたので、意外と多くの方に見学していただけたのではないかと思われます。

②子供工作教室

軽食テント村のほぼ向かい側に設置された大型テントを使用させていただき、子供たちあるいは親子連れの方々を主な対象とした工作教室を開催いたしました。

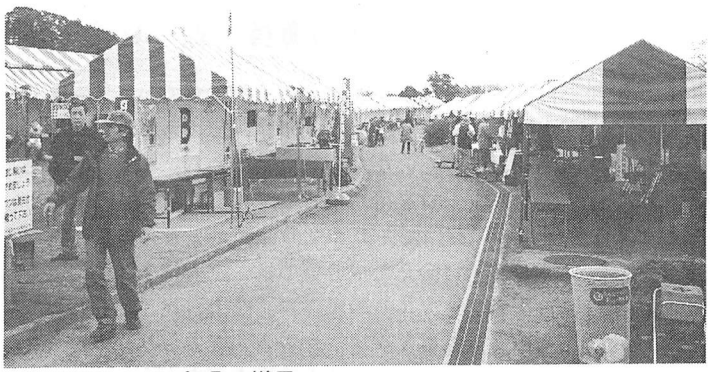
開催時間は、17日（土）の午後から18日（日）のフェスティバル終了時までの間で、１～２時間おきに休憩時間を設けながら、何回かに区切って実施いたしました。開催にあたっては、当研究会の小野紀之常務理事が副理事長を務めている特定非営利活動法人環境学習研究会（理事長：島田親吾氏）に多大な協力をいただき、具体的には、間伐材または卵形の粘土を利用し、鳥の形を模したバードペンダント作りを行いました。こちらは大変好評で、当初用意した材料では間に合わず、かなり追加したようなあり様で、のべの参加人数は300人を越えたのではないかと思われます。参加者の反応も上々で、完成したペンダントをお互いに見せ合う子供たちの姿が大変印象的でした。

なお、工作の合間にバードコールを使ったミニコンテストを数回行い、当研究会の役員等が審判役とその鳴声を判定しました。こちらも、子供たちの一生懸命な姿が大変ほほえましく映りました。

なお、当研究会の隣りのブースでは、島田利子副会長が勤務している神奈川県秦野市立渋沢小学校が展示を行っていました。盛りだくさんの内容に、学校および生徒さんたちの不断の努力と熱意を強く感じた次第です。

本年度のフェスティバルにも引き続き参加する予定にしておりますが、当日は全国各地の活動団体等の参加により、実に様々な催しや展示が各会場で開かれる予定ですので、会員の方々にも、是非一度会場に足を運んでいただければと思います。開催日は、11月16日（土）～17日（日）です。

工作教室の様子



会場の様子

当研究会のブース展示

渋沢小学校のブース展示

もりまき通信(16)

「映画でバードウォッチング　その２」

自然観察指導員　森　真希

●生き物の出演

この数年、生き物好きの私は、映画を見るだびに「生き物」の出演に注意を配るようにしている。しかし、せっかくその出演に気付いても種名の分かるケースはとても少ない。中には生き物そのものをテーマにした作品もあるが、大多数の場合、あまりにも一瞬の登場だったり、シルエットのみで色が分からなかったりと、あくまでも「演出」の一つでしかないのだ。だからこそ、さりげなくスクリーンに出てくるそんな彼等にスポットを当ててみたい。本誌62号「もりまき通信(12)」の続編として、今回も映画に登場した鳥の「出演者」を御紹介したいと思う。

●「となりのトトロ」(1988)

この作品の素晴らしさは、私があえて文章にするまでもない。劇場公開されてから今年で14年、何度となくテレビ放映され、月日が経っても、何回見ても新鮮さは失われていない。もうすぐ２才になる娘も大好きのようだ。

この作品には実に沢山の鳥の鳴き声が使われている。新しい家に引っ越してきた日、小さな橋を渡り「お父さん、木のトンネル！」とはしゃぎながら坂道を駆け上がるサツキとメイ。その背景には「ツピ、ツピ、ツピ」とシジュウカラの鳴き声が。お父さんと娘達の３人で洗濯物を干し終わり、お母さんのお見舞いへ行く時に、サツキが戸締まりするシーンでは、クロツグミのさえずりのような声が聞こえる。そして、自転車で山を越え、七国山病院が見えるとジュウイチの声が。サツキがミッちゃんと登校した後、お父さんが書斎の窓際で伸びをする時、ヒバリの鳴き声が。メイがお弁当を持って庭で小走りしている時、キビタキのようなテンポの速い鳴き声が。メイが小トトロと中トトロを追い掛けて塚森の大きなクスノキの根元をのぞくシーンでは、かすかにゴジュウカラの鳴き声がするのである。

まさに５、６月の田植えの頃を視覚でも聴覚でも味わえる映像美だ。草花も名前が分かりそうな描き方が多い。カンタくんが最初に登場するところでは、キショウブが咲き、メイが落ちているドングリを拾うシーンではヘラオオバコとオオバコがあり、ハナニラみたいなものも咲いている。床下に潜り込んだ小トトロを待ち伏せるメイの傍では、ヒメジョオン(かな？)にキチョウの仲間が吸蜜に。他にも、ネコバスに会えた帰り道では、アマガエルやシュレーゲルアオガエルの鳴き声。夕方、メイを探すサツキの背景にはヒグラシが鳴き、ノカンゾウが咲く土手に上がるとキチキチと音をたてながらショウリョウバッタが飛び出す。

本当に宮崎アニメは、脚本、音楽、キャラクターの素晴らしさもさることながら、生き物の表現も他では感じることのできない心地よさがあり、いつも感心してしまう。機会があったらスタジオジブリの作品を一通り生き物チェックして文章にしてみたいものである。

●「ゴリラ」(1989)

39才のアーノルド・シュワルツェネッガー主演のアクション映画。元ＦＢＩ捜査官を演ずるシュワちゃんは、殺人犯への暴行で片田舎の交通取締官に格下げされる。そんな時、かつての上司の依頼でシカゴの犯罪組織に立ち向かうというストーリーである。

この映画のファーストシーンには気持ちの良さそうな広葉樹の林が出てくるが、驚いたことに「ホーホケキョ」というウグイスの鳴き声が入っていたのだ。ウグイスは日本、台湾、ルソン島などの狭い地域に分布している。もしかして、似た鳴き声を持つ鳥が北米にいるのだろうかと、疑問を持った一声だった。その林の静けさを撃ち破るかのように、山小屋でいきなり銃撃戦が始まる。その時、ギンケイのオスの剥製が木っ端微塵になるシーンがある。ほんの数秒で画面から消えてしまったので、何度か巻き戻し再生をしてやっと確認できた鳥の出演者であった。

●「ドクタードリトル」(1998)

「ドリトル先生不思議な旅」の再映画化で、エディ・マーフィーがジョン・ドリトルを演じる。この作品には実に様々な動物が出演する。オランウータンやアライグマ、ヤギにトラにウマにスカンクにと、数えてみたら20種近くのキャストである。その中で、ドリトル先生に、翼に刺さった枝を抜いてほしいと訴えるフクロウがいた。吹き替えは女性の声だったが、オスなのかメスなのかはよく分からない。種類はおそらくアメリカワシミミズクだと思う。どうやってこのシーンを撮影したのだろう、と考えてしまう程、動物達の演じるシーンには全く違和感がない仕上がりだ。続編もあるので、こちらも早く観賞したいものである。

●「陰謀」(1995)

ジョン・イヤーズ監督のサスペンスもので、舞台はニューヨーク。馴染みのない出演者ばかりで、脚本もあまり魅力を感じず、カメラワークのしつこさに不快感を覚え、「一度見ればいいや」と思ってしまう。制作者には悪いが、私の中では低評価の作品である。しかし、わりとしっかりカモメ類が登場しているので、紹介したいと思う。

ファーストシーンとラストシーンに、複数のカモメが飛翔する場面がスローで流れる。私は日本産のカモメの識別にも明るくないので、世界の野鳥に詳しい知り合いに、ダビングしたテープを見てもらい、種類を教えて頂いた。正体はクロワカモメとただのカモメのアメリカ亜種かもしれないとのこと。カモメ類が画面に登場する映画は数多くあるが、この映画のようにハッキリと大きく写されていることは、案外少ないかもしれない。

●「ウォーターワールド」(1995)

多額の制作費をかけたわりには興業収益に反映しなかった映画を、業界では「ボムムービー」、爆弾映画というらしい。「アカデミー賞」とは反対の「ゴールデンラズベリー賞」を総なめしたこの作品、私はこの映画も「ボムムービー」に入るのではと、映画ノートを見直しながら思っている。

ケビン・コスナー主演、温暖化の進んだ未来の地球が舞台。ファーストシーンの映像では、海面が上昇し陸地の殆どが消えてなくなっている設定。よって、現在の野鳥の分布とかは考えてはいけないらしい。話の終盤で、気球の縁に止まるカモメが登場。これも先の「陰謀」同様、詳しい方に同定してもらった。見なれているカモメよりも足が細くて長く、尾羽は真っ白、黄色の嘴は下嘴の先端に赤い点が一つあるのが確認できた。動物プロダクションから連れてこられたものなのか、初列風切羽が切り落とされているように見える。ということは、画面からカモメが消えた時、飛んでいったのではなく「落ちて」いったのか。このカモメはオオカモメに良く似ていると教えて頂いた。

●「ＴＡＸｉ２」(2000)

1997年に作られた「ＴＡＸｉ」の続編。舞台はマルセイユとパリで、日本の防衛庁長官が誘拐され、タクシー運転手のダニエルと刑事のエミリアンが犯人一味を追って救出するというストーリー。フランスでは「タイタニック」を抜いて、国民の６人に１人が見たという大ヒット映画らしい。個人的には、日本人の描写にやや閉口するところもあり、脚本の面白さは１作目のほうが良かった気もする。

さて、この映画のどこで鳥が出演するかというと、ダニエルの連れ合いのリリーが電話で話しているシーンである。リリーが寄り掛かる壁に飾られている絵、その中にノガンの類が描かれていた。ちゃんと図鑑で見比べなかったので、ノガンだかヒメノガンだかアフリカオオノガンだか確認できなかったのが心残りである。

●「南極物語」(1983)

実話を元に描かれた映画は、下手な脚本よりも深い味わいがある。しかし、２時間半という長さはには疑問という声もあった。ヴァンゲリスの音楽が与える印象があまりにも大きかったために、ストーリーがついていかなかったという。なるほどと思ったが、私は素直に感動した作品である。

昭和32(1957)年、第１次日本南極観測隊がオングル島の昭和基地で調査をしていたが、２次隊を乗せている観測船「宗谷」が厳しい氷状で接岸できず、昭和基地を一時閉鎖する。１次越冬隊員11名と子犬８頭と母犬シロ子をなんとか「宗谷」に収容できたが、15頭の樺太犬を残していくことになった。激寒の南極でひと冬を乗り切った２匹の樺太犬と、犬を置き去りにした観測隊員らの苦悩の描き方は、日本人の心に深く刻み込まれたであろう。以前、国立科学博物館で「ふしぎ大陸南極展」が開かれた時、生き残ったタロとジロの剥製を見ることができた。

「このこたちがそうなのか…」と実物を前にして立ちすくんだ。多くの人に感動を与えたこの２頭の樺太犬は、今も大切に国立科博と北大農学部博物館に保存されている。

前置きが長くなったが、この映画には「トウゾクカモメの飛来が厳しい冬の終わりを告げる」というナレーションがあり、トウゾクカモメらしいカモメが映される。物語の所々で、アデリーペンギンも登場する。ペンギンに囲まれて調査をしている観測隊の姿や、ペンギンの雛を襲うカモメの仲間を、さらに樺太犬たちが捕食するというシーンも印象的である。やはり、南極といったらペンギンは外せない位置付けだろう。

●「グース」(1996)

原題は「FLY AWAY HOME」。カナダガンが主役の実話を元にした映画である。これはそのうちＤＶＤで欲しいところであるが、我が家にはまだＤＶＤレコーダーもプレイヤーもないので当分お預けである。原案者のビル・リッシュマンさんは、実は彫刻家。本当に映画とほぼ同じ方法でガンの渡りの誘導に成功していることは、野鳥保護の業界でも有名な話である。ファーストシーンは、ニュージーランドの雨の夜から始まる。映像の美しさや、16羽のガンが大きく育っていく経過、事故で母親を亡くした13才の少女と10年ぶりに再開する父との心理描写、ビルの谷間を抜けて飛行するシーンなどなど、見どころ満載である。家族で見たいお勧め映画の一つである。

●「ベイブ／都会へ行く」(1998)

1995年製作の「ベイブ」の続編。牧羊豚となった小豚のベイブが農場の危機を救うために、マグダ・ズバンスキー演ずるエズメ・ホゲットと一緒に都会へ赴く。しかし麻薬犬のために起きたトラブルで目的地に行くことが出来ず、空港で足止めに。そこで宿泊したホテルがアニマルホテルだった、というストーリー。チンパンジーやオランウータン、ノドジロオマキザルらしきサルなどが出演する。話の序盤で、アヒルのフェルディナンドがベイブとエズメの乗った飛行機を追いかけるシーンがある。この時、コシグロペリカンの群れが出てくるが、どうも作り物っぽい。オーストラリアでよく見られるペリカンらしい。動物達を上手に使っているのに、逃走シーンやパーティー会場のハチャメチャ騒ぎで長く時間を取り過ぎ、このあたりをもっとすっきりして欲しかったという感想をもった。やはり、続編ものが１作目に感じる好感を上回ることは少ないかもしれない。

●映画という文化

映画は、その歴史が始まって以来、人の文化に深く浸透してきたエンターテイメント。話題作は必ず劇場に見に行く人や、原作を欠かさず読む人、デートコースに選ぶ人、好きな映画のセルビデオやＤＶＤをコレクションする人、映画を個人で製作する人、自宅にホームシアターの装備を備えている人などなど、映画との付き合い方は人によって多種多様である。

私は今、育児でなかなか劇場に行くことができないが、そのうち娘とも一緒に楽しめればと、ちょっと先の未来を楽しみにしている。

書籍紹介

『これがカモ！　カモなんでも図鑑』

大畑孝二（文・写真）、山本浩伸（絵），
2001年10月，大日本図書　定価（本体）1,400円

事務局　箕輪　多津男

石川県加賀市の片野鴨池と言えば、ラムサール条約にも登録されているわが国でも重要な湿地の一つであるが、そこで活躍している日本野鳥の会のチーフレンジャーである大畑孝二氏によってまとめられたものが本書である。

イラストについては、やはり同地の元レンジャーで、現在は日本野鳥の会・普及室で活躍している山本浩伸氏によって描かれている。

「カモなんでも図鑑」とタイトルにもある通り、カモという鳥がそもそもどういう鳥であるのかということから始まって、その骨格や身体の仕組み、生態一般、そして彼らの生息環境を整えるための水田の復元や、保護活動の国際的な展開に至るまで、詳細にかつ大変わかりやすく解説されている。もちろんその内容については、用語の解説等を含め、小学生でも十分理解できるよう配慮がなされている。

挿入されている多くの写真やイラストも鮮やかで、「カモたちの世界」に思わず引き込まれてしまうこと請合いである。

冬期におけるバードウォッチングの対象の中でも、カモはまさに主役であると言える。本書によって彼らの存在を改めて見直してみるのも一興であろう。今秋、再び彼らが日本に渡ってくる前に。

四季旬報№１７４

平成14年4月中旬

（三河湾周辺の自然）

平年気温　高 18.7℃　低 9.9℃　平均 14.2℃

平年降水量　47.9mm（県農業試験場蒲郡支所）

全国愛鳥教育研究会

三ヶ根ハヤブサを守る会

http://sk.aitai.ne.jp/~atsumi/

渥美　守久

若葉萌える頃

桜は散って、前線が北上する。自然林の山が一際盛り上がって照葉樹の輝きが美しい。あちこちから新緑の便りが伝わる。木々の花のパノラマがめまぐるしく変化し、冬の名残が消えていく中、春に目覚めないでいつまでも眠りこけているものもいて面白い。寝坊助の名はネムノキ、ナツメ、トチノキ、ナンキンハゼ、アオギリ、サルスベリ、アメリカデイゴなどである。その代表にされたのがネムノキなんだろうか。「合歓の木」の由来を調べてみると、夕方小葉を合わせ眠る様に閉じることから名付けられたとある。（参考花の木の大辞典、花歳時記）私は別の解釈があるのではないかと考える。桜が咲いても知らんぷり、春を眠りこけているところからこの名がついたとも思える。その両面が考えられよう。

ところで、春山でひときわ輝くのは照葉樹である。その筆頭は、クスノキの萌えるようなあめ色の若葉だろう。落葉樹の広葉はどちらかと言えばつや消しの緑である。クスノキに次いで湧き立つようにシイ、タブ、ツバキ類が古い衣を脱ぎ捨てる。新芽が成長する分だけ落葉する合理性が面白い。そこには、美しい新緑の陰で風雪に耐えた濃い緑葉のまま、人知れず散っていく侘しさもある。だが、秋の黄葉のように美しく彩りながら落ちていくものもある。ツバキ、カクレミノ、クロガネモチなどだ。その散り際にも目を向けてやりたい。常緑樹の分厚い葉は、じっくり時間をかけて土に返っていく。

春は全ての自然が植物を中心に展開していく。あの人に嫌われる毛虫は、新芽の出る一週間前後に照準を合わせるように発生する。生まれたばかりの幼虫は、柔らかい若芽を傷つけ、湧き出す樹液をなめるように飲みながら生長する。観察してみると一日約1mm、一週間もすると体長1cmにもなって各枝に分散していく。これら虫たちの成長を待つかのように野鳥は子育てを始める。貴重な蛋白源とするのである。その巧みさに目を見張る。自然の輪が回り始める春は、この植物と動物の生きるためのタイミングでつながっている。

いっせいに開花する春は、特に花の咲き始めに注目して春との会話を始めよう。

＜木の花＞…平年下旬に咲き始めるツツジがもう見られる。黄梅、利久梅、梨、山吹、白山吹、八重桜、夏グミ、木瓜、木苺、小葉のガマズミ、山椒、朴の木、アケビ、三つ葉アケビ、ムベ（常緑）山桃。

＜木の実＞…ツルグミ、ハゼ、キンカン（野鳥のフンの中から）

＜草花＞……海浜植物…ハマダイコン、ツルナ、コウボウムギ。

田んぼ…イヌガラシ、キツネノボタン、スズメノテッポウ、カズノコグサ、オオボシソウ。

野道、乾燥地…ジシバリ、カタバミ、シロツメグサ、コウゾリナ、ハルジオン、タンポポ、ノゲシ、スズメノヤリ、マツバウンラン。タチイヌノフグリ。

春の野草衰えて、夏草がいきおいよく成長を始めている。

＜野鳥＞……囀りが聞こえる繁殖中の野鳥…スズメ、モズ、カワラヒワ、ムクドリ、カラス２種、トビ、ウグイス、メジロ、ホオジロ、キジ、コジュケイ、ヤマガラ、シジュウカラ。ハヤブサは雛が生まれ子育て中。

まだ少し見られる冬鳥…ジョウビタキ、マヒワ、シロハラ、ユリカモメ（頭は黒頭巾）。鴨池のキンクロハジロ１００羽土、ホシハジロ６羽。北帰行の先発隊は、もうシベリアへたどり着いただろうか。

やって来た夏鳥…ツバメ、アカハラ、カケス。オオルリ、キビタキの初音。サシバとオオタカが、ここぞと声高らかに縄張り宣言だ。北上するヒヨドリの群れが、まるで雲のように通りすぎる。竹島にはコアジサシの姿がある。

＜その他＞…孟宗竹の筍出る。キリギリス（5ｍｍ）。
ジョロウグモ（５～６ｍｍ）まだ薄茶色
もう小型のネットを張っている。

四季旬報№１７６

平成１４年５月上旬

（三河湾周辺の自然）

平年気温　高 21.7℃低 13.3℃平均 17.4℃

平年降水量　63.1mm（県農業試験場蒲郡）

全国愛鳥教育研究会

三ヶ根ハヤブサを守る会

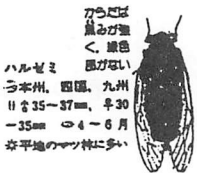
http://sk.aitai.ne.jp/~atsumi/

渥美　守久

春蟬

山の緑が一通り出揃う５月中旬、風通しも悪くなり、最高気温は25℃を超す日もあって重苦しさを感じる。ツツジは５月の連休にはピークを過ぎてしまっていた。５月は春なのか初夏なのか表現に迷う事がしばしばだ。

「♪夏も近づく八十八夜、野にも山にも若葉が茂る。…」東洋の暦では３日後の５月５日が立夏である。



今春は３月の平均気温が３℃、４月は２℃ほど高い状態で、桜をはじめとする自然事象が約２週間ほど早まって推移した。

桜が咲く頃に、あれほど明るくさわやかに囀っていたホオジロやシジュウカラやメジロは、雛が生まれたらしく黙りこくっている。木々の繁茂と共に、山は無表情になっていく。このような時期にハルゼミは鳴く。その声を聞くと、いっそう蒸し暑さを感じるのである。松だけに生息するので松蝉とも言われる。日も高く上った午前 10 時ごろになると、急に騒ぎ出す。それも松全盛の昭和の終わり頃とは比較にならないほど声量が痩せ細ってしまった。名残の合唱である。リーダーがはじめにジージーと発声すると、次第に合唱となって、暫く続いては鳴き止む。尾根筋のあちこちからムゼー、ムゼーとか、ズウエー、ズウエーとも聞こえてくる。ちょうどレコードが空回りをしているような感じだ。なんとも表現しにくいしわがれ声がでウエーブしていく。松のステージの何処で鳴いているのか、じっと見つめるのだが姿が見えない。

愛鳥週間に、「全国野鳥保護の集い」が静岡県浜北市の県民の森で催された。この時、一面のアカマツ林でこのハルゼミの大合唱に遭遇した。それは昭和の時代、

三ヶ根山で聞き慣れた迫力であった。時折、ぱっと移動する♂を目で追って、激しく歌う姿を双眼鏡でとらえた。

松が完全に失われたら、ハルゼミの声は聞かれない。この自然事象を、今のうちに多くの人に聞いて欲しい。

＜ハヤブサ情報＞

そろそろと思って5月5日に岩棚を観察したところ、巣立ちは終わっていた。2羽の雛が、無事今年も巣立ったことを喜びたい。何にしても中部国際空港の埋め立て工事が終わらないことには、声も上げられない情況である。他にサシバもオオタカも蒲郡周辺で繁殖している可能性は高い。それら、猛禽類の生息は、なによりも自然の豊さを証明している。

＜エコストック＞

みどりの日に「森の文化祭」を盛大に催した。実行委員会では、いろいろな知恵を出し合った。自然体験をしたばかりのところへ、FAXで「エコストック」の誘いがあった。5年前大須劇場で「万博をどう考えるか」語り合った仲間のT氏からである。かつて、野辺を会場とするコンサートで「愛と平和」を希求し、メッセージを世界に発信したウッドストックをコンセプトとした催しだ。いまや人間は自然の生態を無視して生きられない。地球上の全ての自然・生命が共有する文明が求められる時代だ。愛知万博を市民の立場で考える「だれでもばんぱく協会」が主催する。自然に目を向けている仲間達で、知恵と技を出し合おうとの企画である。「三ヶ根ハヤブサを守る会」もとっくに参加団体に連記されていて、手回しの良さには恐れ入った。名古屋市の庄内川河川敷で、多くの自然仲間と交流できることを楽しみに参加する。FAXだけのやり取り、そのスケールの大きさと大雑把さが、かえって創造性を高めてくれる。これこそ事前打ち合わせなしの「参加と創造」の新しい文化となろう。寝袋一つの二日間。野性的なにおいがぷんぷんする。わくわく感のあるこの催しで、ハヤブサ保護の何かが変わるかもしれない。新たな刺激を期待している。この際、「ハヤブサの会」への若者の参加を歓迎する。

四季旬報№１７８

平成１４年５月下旬

（三河湾周辺の自然）

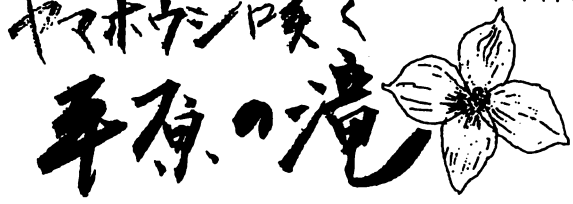
平年気温　高 24.1℃低 15.5℃平均 19.6℃

平年降水量　45.7mm（県農業試験場蒲郡支所）

全国愛鳥教育研究会

三ヶ根ハヤブサを守る会

http://sk.aitai.ne.jp/~atsumi/



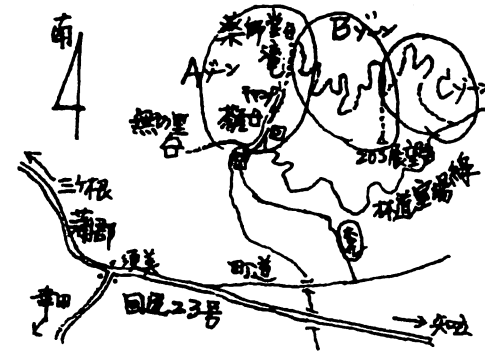
渥美守久

源氏蛍で知られる西尾市の「平原の滝」は、三ヶ根山系の尾根にある茶臼山（２９１ｍ）の北谷にある。蒲郡から行くと、国道２３号沿いの幸田町須美の集落を過ぎて、南に入ってすぐのところだ。吉良と西尾と幸田の入り合った地域である。

私は初夏のこの地が好きで、山麓の小高いところにある休憩所「無の里」にはよく立ち寄る。囲炉裏端でお抹茶をいただきながら　季節の話を交わす。はだか電球の灯る暗い部屋から眺める外の景色は、一幅の大きな額縁のようである。縁側に座り込んで、柿若葉や竹の黄葉を眺めていると、キャンパスの中に居るような不思議な思いにとらわれる。突然、ツバメが頭をかすめて飛び込んで来た。ツバメ返しを披露する。まさに原田泰治の絵の世界だ。

「無の里」は、岐阜県徳山村の合掌造りの旧家を移築したものである。１５年にもなる１本の淡墨桜が堂々と枝を張っている。

この周辺には野鳥はもちろん樹木の種類も多い。季節に親しむには最適な場所である。私流の平原の紹介をしてみたい。下の略図、ABCの３ゾーンに分けてみた。



Ａゾーン…「無の里」入り口から、そのまま山路を１００ｍも登っていくと、流しそうめんの茶屋に出る。ここからがキャンプ場入り口である。距離にして２００ｍ、沢伝いに山の中腹の滝を目指して登っていくと、滝の上に薬師堂がある。

「今から１１２０年前、比叡山座主の慈覚大師は、三河の国幡豆郡平原の里に一夜の宿をとられた。その夜、薬師如来の夢のお告げを得て、渓谷を尋ね山を登ったところ、紫雲立ち込める滝を発見した。この滝にあたればどんな難病も治るといわれる。」

…何処となく京都貴船の沢沿いを歩いているような気がする。歴史を感じさせる山桜の古木をはじめ、杉、楢の高木の下にはヤマボウシとエゴノキの白い花が咲く。カゴノキ（クスノキ科）の太いのが１本、樹肌が小鹿の模様に似ている珍木である。落葉樹では青肌、鷹の爪、楓、紫式部が、常緑ではヒサカキ、ソヨゴ、クロバイなど親しみ深い顔ぶれを見せる。沢音に混じってオオルリの声が飛び込んで来る。なかなか先へ進めない。この辺りは初夏を楽しみながらゆっくり登るがいい。

B ゾーンは、谷から尾根を登る道で急峻である。さほど大きな木はない。アオハダ、ネジキ、コナラ、タカノツメ、ムラサキシキブ、アカメガシワ、ミツバツツジ、ヒメヤシャブシ、ヤマハギ、ヤマウルシなどの落葉樹と、常緑のソヨゴ、クロバイ、シャシャンボ、ヒサカキ、アカマツの若葉や花が、次々と何度も顔を出す明るい山路だ。声をかけながら木と会話して登ることをお奨めしたい。距離は短いが、大きな標高差を登りきると平坦な尾根筋に出る。ここは標高２０３ｍ、幸田や岡崎の展望が開けた展望台になっている。お弁当ならここに限る。

C ゾーンは、登ってきた尾根の北の谷筋を、ゆっくり下る緩やかなコースである。コナラやヤマザクラの高木の林で、広々した緑の空間だ。三ヶ根山系の幡豆側では見られないヤツデに似た花のタカノツメ（ウコギ科）が群生する。北斜面独特の草花を楽しみながら歌でも歌いながら、およそ３００ｍの行程を進むと、やがて林道室場線に出る。ここは逆コースの入り口でもある。

舗装された林道を右に進めばＡゾーンの出発地点にもどる。季節の草木を楽しむにはこの林道も味わい深いものがある。

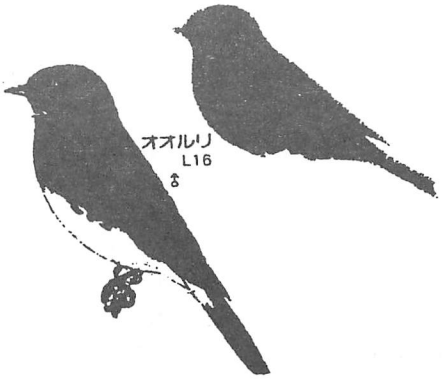
「平原の滝」のハイキングコースは、山の中のABCゾーンと林道と「無の里」の５つのゾーンから構成されているとも言えよう。

自然と親しむには、気に入ったコースを季節ごとに訪ねて、自然との会話が出るようにするのが秘訣である。

エゴノキ

ネジキ

タカノツメ



竹　～草本でも樹木でもないもの～

事務局　箕　輪　多津男

タケ（竹）は不思議な植物である。もともとイネ科あるいはその中のタケ亜科に分類されていたが、最近では、イネ類との相違点も多いということから、タケ科とする学者も少なくないようである。イネ類は１年草の草本で枝分かれや葉柄が存在しないが、タケ類は多年性でしかも木化し、稈（かん：幹にあたる部分）には節があり、その付近から出る枝は分岐する。そして葉のつけねには小さな葉柄もある。

一方、稈がりっぱに木化し、しかも高さが時に20～30mにも達するということから、樹木にあたるのではないかと言えば、こちらも大きな違いがある。

まず、稈の成長が何より急激である。その成長のメカニズムは「節間成長」と呼ばれ、それぞれの節の上部に成長層を持っており、それらが一斉に伸びるという仕組みになっている。従って、一般的な竹の種類であるモウソウチクやマダケなどを例にとると、一日に平均30cm強、中には１日に１mを超える成長を起こすこともあるようである。しかし、その成長期間は２ヵ月～３ヵ月ほどで終了し、タケには形成層がないこともあり、その後は枯れるまで稈が伸びたり太くなったりすることはない。

また、稈は一般的に中空となっており、そのことが成長の速さの要因の一つにもなっている。タケの外皮も樹皮とは、構造上、大きく異なっている。

さらにタケは通常、地下茎を伸ばし、そこから芽（タケノコ）を立ち上げることによる無性繁殖を行う。こうした形態や生態も、樹木には見られないものである。

このようにタケは、植物の世界において、草本とも樹木とも違う独特の地位を築いているわけである。

世界的に見ると、タケの仲間は温帯性のものと熱帯性のものに分けることができる。その最も大きな特徴の違いは、株のふえ方にある。

温帯性のものは地下茎を四方に広げながら、間隔をおいて芽を出し、稈を立ち上げる。従って、温帯性の竹林においては、一本一本の稈が空間をおいて散在する形となる。ところが、熱帯性のものはすでに成長を遂げた稈の基部から、直接芽を出すような形で新たな稈が立ち上がる。従って、熱帯性のタケはそれぞれがくっついたような形、すなわち群生するようにして生えてくるのである。

また、染色体の数も温帯性のタケが48なのに対して熱帯性のタケは72と大きく違っている。ただし、一概に温帯性や熱帯性のタケと分けてみても、その種によっては著しい特徴を示すものが存在する。例えば、インドや東南アジアに分布している「実竹（ジツチク）」と呼ばれる仲間は、稈が空洞になっておらず、木化した組織で埋められている。また、節間の長さが約２mにも達する種類や、稈の色が黄色いもの、稈がつる状になっているタケも存在している。

さらに温帯性のタケにおいては、突然の開花の際にのみ、わずかな実を結びそこから発芽する（有性生殖を行う）ものが大半であるが、熱帯性のタケにおいては、かなり結実量が多くしかも発芽率も高いこともあり、時に地面だけではなく枝上でも発芽することがある。

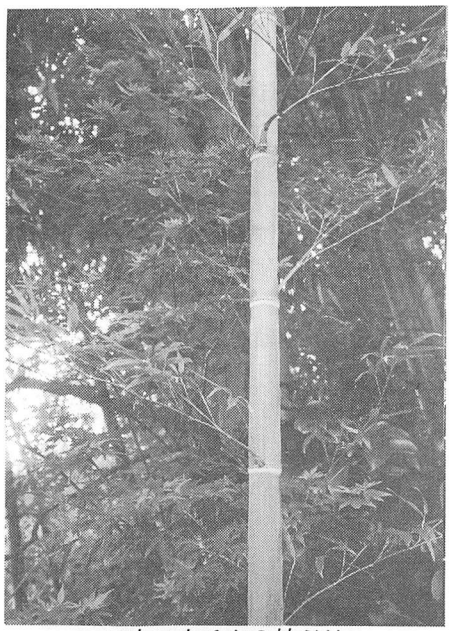
日本においてもタケの変種がいくつかある。例えばホテイチクと呼ばれるものは、直径４cm程度の太さではあるが、節の形状が稈ごとにばらばらであることが大きな特徴である。また、キッコウチクやブツメンチクは、いずれもモウソウチクの変種であるが、地上から２～３mまでの稈の上下の節が交互につながることによって、あたかも節間が「亀甲」のような形になる、奇妙なタケである。しかもこの作用は突然変異によるということで、個体によっても現われ方が違うようである。

竹林の風情（ふぜい）というものは、他の植物には作り出すことのできない独特な趣きがある。タケノコも人々の食文化に深く根ざしている。また、モウソウチクやマダケの竹林は、日本でもいたる所で見ることができる。春先に顔をのぞかせるタケノコが、１日に30cm以上という驚異的な速さで成長する様子や、一方で稈の密度が高くなりすぎて栄養不足のために共倒れにならないように、一定の割合で成

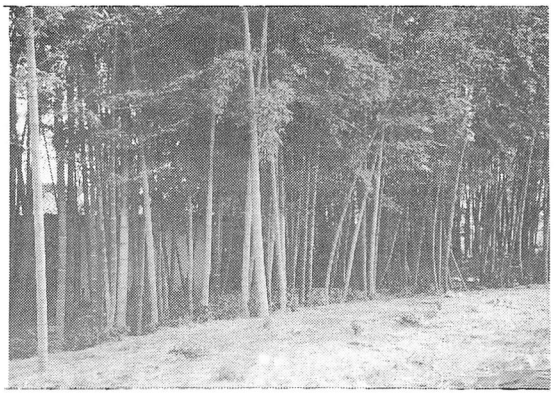
長の途中の稈が自ら枯れていく様子、そして年ごとの枝や葉の成長や更新の様子など、身近なところにある竹林で一度じっくりと観察してみることをおすすめしたいと思う。タケはやはりタケ以外の何ものでもないようである。

【参考文献】

内村悦三，1994年，『「竹」への招待』，研成社

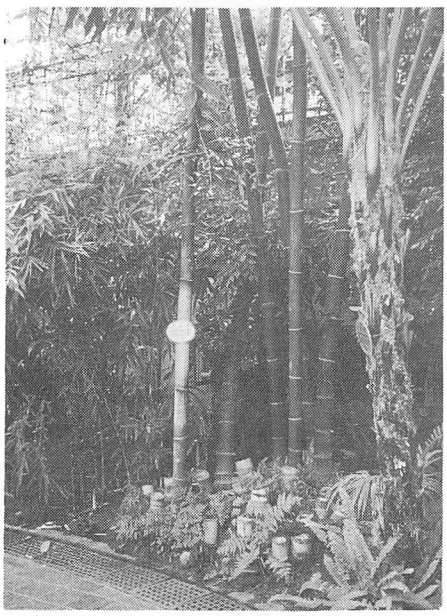


モウソウチクの枝ぶり



モウソウチクの林

ブツメンチク



熱帯性のマチク（新宿御苑・温室）

熱帯性のゾウタケ（夢の島熱帯植物館）

村本義雄顧問が、中国野性動物保護協会の名誉理事に！

本会の村本義雄顧問が、この度、日本人ならびに外国人としては初めて中国野性動物保護協会の名誉理事に選ばれました。

村本顧問は、50年程前より能登に生息していた野生のトキの保護活動に尽力され、その後中国で野生個体が再発見されると、いち早くこれに着目され、1991年には陝西省を訪問、1993年には外国の民間人として初めてその生息地である洋県を訪れ、爾来、一貫して中国のトキ保護事業に多大なる貢献をされてきました。

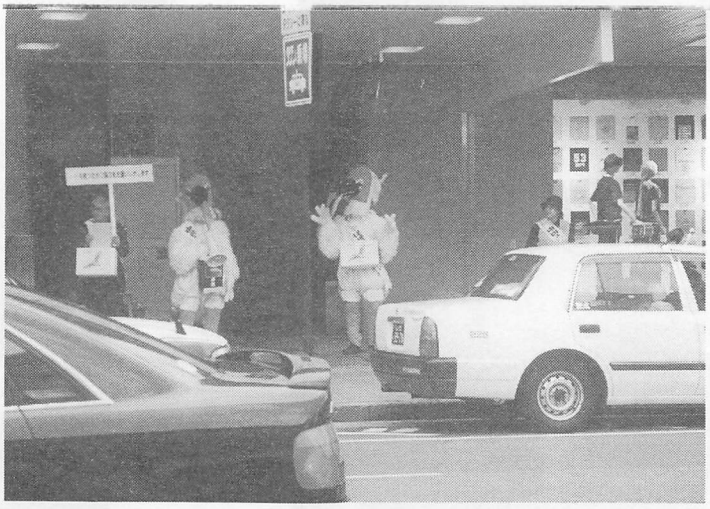
少なからぬ支援金の送致や設備等の援助のみならず、現地訪問のたびに地元の学校を訪れ、トキを中心とした愛鳥教育ならびに環境教育の普及にも積極的に取り組んでこられました。まさにトキ保護を通じて、日中の大きな「かけ橋」となられてきたわけです。

こうした多大な功績により、今回の栄誉ある名誉理事へのご就任が決定されました。

それを伝える中国野性動物保護協会から村本顧問宛の文書をP36に掲載します。

村本顧問は、現在、特定非営利活動法人（ＮＰＯ法人）である日本中国朱鷺保護協会の会長として、ますますその活動に全身全霊で打ち込んでいらっしゃいます。本会といたしましても、そうした姿に心より敬意を表しますとともに、愛鳥教育ならびに環境教育の推進に向け、是非これに続きたいと考えるものです。

なお、最近の村本顧問の活動の様子を伝えるものとして、平成14年６月５日付の日本中国朱鷺保護協会の文書を掲載します。なお、ここで触れられている５月12日の金沢市内での募金活動が、翌５月13日北国新聞に掲載されましたので、これも資料として掲載します。



北総

◇…愛鳥週間に合わせ、羽咋市のＮＰＯ日本中国朱鷺保護協会は十二日、金沢市のめいてつエムザ前で、着ぐるみのトキ二体を引き連れて中国トキ保護支援基金の募金活動を行った＝写真＝。

◇…トキの繁殖成功で過密状態にある中国陝西省洋県のトキ飼育保護センターに、飼育かごを増設するため寄付を募った。午前は香林坊でも行い、中国人留学生の劉江橋さんも参加した。

◇…幼いころに見たトキを懐かしんで、着ぐるみに握手を求めるお年寄りもおり、村本義雄会長は「日中国交正常化三十周年の年にトキを通じて一層友好を深めよう」と呼び掛けていた。

トキ保護協力者、各位

平成14年6月5日
NPO法人日本中国朱鷺保護協会
会長　　村本義雄

風爽やかな6月の季節になりましたが、お変わりありませんか？
日頃、トキ保護にご賛同いただきまして感謝しております。
今年もトキの繁殖期を迎えましたが、佐渡のとき保護センターには、10羽のヒナが生まれて25羽になりました。
中国では洋県や西安、北京の動物園にも順調に増えて420羽余りですが、2,000羽が目標です。

6月初旬の情報では、野外には32の巣から66羽のヒナが見つかりました。
飼育センターでも、26の巣から36羽のヒナが生まれて、過密状態になっています。これを解消させるために、洋県のトキ60羽を飼育センターから350ｋｍ離れた秦嶺山北麗の楼観台へ移しました。ここでも繁殖させる飼育舎が無くて一つの籠に4羽(2番)を入れて巣篭りさせるという深刻な事態になっています。

飼育のトキが増えると、当然、将来には野外への放鳥を考えております。
しかし、飼育舎のトキをいきなり放す事は危険で、大型ネットの中で1年間の訓練が必要です。ネットの中には木を植えたり、湿地を作りドジョウを放しますが、こうした施設を建設する費用が不足しています。
現在、陝西省野生動物保護協会から、実情のプロジェクトを計画して、日本の支援を要請して来ました。

また、トキが巣ごもりする村の学校では、机や椅子の不足で、先生や児童の代表から寄付の要請があります。21世紀にトキを守り育てる学童の教材を贈ることにしています。

地球からトキを絶滅させないためにと、私共の協会では、募金活動を実施しております。

愛鳥週間中の5月12日に、金沢の繁華街で募金を呼びかけましたが、皆様にも、ぜひ、ご協力をお願いします。

(野生トキ繁殖地の子供達が学ぶ、学習机)　中国陝西省、洋県

村本先生こんにちは

中国野性動物保護協会は、朱鷺保護のために貢献した人として、貴殿を表彰し、激励することを決めました。特に、貴殿達野性動物保護活動に突出した功績のある６名を名誉理事に決定したことをお知らせします。

今年の洋県の野外と飼育センターを合わせて、朱鷺３００羽前後です。楼観台飼育センター７８羽、北京２８羽です。以上状況をお知らせします。

６月６日　常秀雯

中国野性動物保護協会文件

陳玉村等６名の中国野性動物保護協会名誉理事決定の件について

福建、江西、広西、陝西、甘粛省、自治区野性動物保護協会：

野性動物保護事業において、突出した功績を上げている人を激励し、全社会の関心を引き付け、野性動物保護協会の仕事を支援し、野性動物保護事業の展開を推進させるために、中国野性動物保護協会は、第三期、第二回常務理事会で審議し、｛中国野性動物保護協会名誉理事授与方法｝の規定により、陳玉村・龔三堂・鐘国華・王廷正・村本義雄・胥明粛の六名を中国野性動物保護協会名誉理事に決定した。任期は２００２年５月から２００６年５月まで。

名誉理事になった人は、更にいっそう努力し、続けて好成績を上げ、野性動物資源保護のため、新しい功績を出すよう希望する。

附信：　陳玉村等６人の紹介
参考：　中国科学協会
回覧：　国家林業局保護部、国家瀕管理署、各常務理事、各省（自治区、直轄市）野性動物保護協会

附信：　陳玉村等６人の紹介

陳玉村氏：　男、１９４３年生。現在　福州パンダ研究センター主任、研究員。長期に渉り熱心にパンダの保護研究に当たり、その研究は２５年間１日の如くである。全国五一労働賞のメダルを獲得し、全国野性動物保護の先進人等の称号が与えられている。

龔三堂氏：　男、１９４９年生。現在、江西省人大常委会委員、研究員。彼は、江西省野性動物保護に関する法規を制定し、野性動物保護の調査をし、環境保護河川行を組織し、行動を展開し、野性動物保護と状況問題調査を発展させ、野性動物保護及び棲息地生態環境の厳しい取締を敢行し、野性動物に危害を与えない条令を制定し、犯罪分子の捕縛の法律を督促した。数十年に渉り、江西省野性動物保護事業に突出した功績を上げた。

鐘国華氏：　男、１９３５年生。元広西壮族自治区林業庁副庁長、広西壮族自治区野性動物保護協会会長。長期に渉り、広西野性動物行政管理指導員を務め、野性動物愛護に関心と支援を持ち、広西野性動物保護のため大きな功績を上げた現在、退職したが、依然として野性動物保護の業務に継続して当たり、休まず奮闘している。

王廷正氏：　男、１９３０年生。現在、陝西師範大学教授、博士課程生の指導。主に、鳥類の分類、生態分野の研究に従事する。発表論文６０余編、出版専門著作十余部。国家教委より優秀教材二等賞を授与され、陝西省科学技術より成果を認められ、中国科学院より進歩二等、国家教委科技より進歩三等賞を表彰される。

村本義雄氏：男、１９２５年生。日本国籍。１９９１年より陝西省を訪問、朱鷺の考察以来、ずっと中国朱鷺保護事業に携わり、多くの講演会を持ち、宣伝し、中国の朱鷺保護募金をしてきた。数年来１千数万円の義援金と機器設備を援助し、朱鷺保護事業に貢献した。

胥明粛氏：　男、１９４２年生。現在甘粛省祁連山保護区管理局高級技術者。以前第一・第二局中国野性動物保護協会理事、西北五省、区野性動物委員会委員。以前、甘粛省野性動物管理局参与、甘粛省祁連山自然保護区管理局の運営に当たる。主に、｛甘粛省動物誌｝｛西北珍稀野性動物誌｝を編纂し、また、甘粛省大型動物の調査事業に参加した。野性動物の科学的研究分野において宣伝、教育し、合理的開発利用の成果は顕著である。公益事業について熱心に取り組み、野性動物と自然保護各分野における活動に参加する志は最高のものである。

日本語訳　永山　静子

平成13年度　収支決算報告

（単位：円）

【収入の部】
会費　４２６,０００
売上　１５,４００
寄付金 1,０００
参加費 7,０００
受取利息　２３
前期繰越収支差額　４００,０１０
収入合計　８４９,４３３

【支出の部】
会誌発行費　４０３,０００
通信運搬費　７４,７６０
会議費 1,８７５
事務消耗品費 ４９,９７０
雑費　1,３５０
次期繰越収支差額　３１８,４７８
支出合計　８４９,４３３

前期繰越収支差額　４００,０１０円
当期収支差額 －８１,５３２円
次期繰越収支差額　３１８,４７８円

上記の通り報告いたします。
平成１４年３月３１日
会　計　染谷優児
事務局　箕輪多津男

監査の結果上記の通り相違ないことを認めます。
監　事　徳竹力男
監　事　村口末弘

本研究会発足当初より、永年に渡りご尽力をいただいておりました村口末弘先生が本年をもちまして監事をご退任されました。これまでのご指導と多大なるご協力に対し、ここに改めて感謝の意を表したく存じます。本当にありがとうございました。

なお、後任の監事には、井口豊重理事に新たに就任していただくことになりました。改めて、よろしくお願い申し上げます。

【全国愛鳥教育研究会役員名簿】

（五十音順）

任期　平成14年4月1日～平成16年3月31日

＜顧　問＞
柴田敏隆（神奈川県横須賀市）
千羽晋示（東京都大田区）
松田道生（東京都豊島区）
村本義雄（石川県羽咋市）
柳澤紀夫（埼玉県入間市）

＜会　長＞
杉浦嘉雄（大分県大分市）

＜副会長＞
渥美守久（愛知県蒲郡市）
島田利子（神奈川県秦野市）
染谷優児（東京都武蔵野市）

＜常務理事＞
岩渕成紀（宮城県仙台市）
小野紀之（東京都大田区）
堤　達俊（東京都町田市）
長屋昌治（千葉県千葉市）
平田寛重（神奈川県伊勢原市）

＜監　事＞
井口豊重（東京都杉並区）
徳竹力男（東京都荒川区）

＜理　事＞
浅沼和男（東京都三宅村・(渋谷区)）
斎藤一紀（山梨県高根町）
皿井　信（愛知県豊橋市）
武石千雄（大分県玖珠町）
田中　忠（熊本県熊本市）
田村耕作（福岡県福岡市）
浜田孝正（熊本県中央町）
浜本奈鼓（鹿児島県姶良町）
林　梅夫（富山県礪波市）

編集後記

昨年の「第２回環境教育研修会 in YOKOHAMA」のテキストを掲載しました。紙数の関係で縮小してあります。原版のサイズはＡ４です。堤・三枝両氏の創意工夫が随所に盛り込まれています。

このテキストに盛られた内容のいくつかは、そのまますぐにでも使っていただけるものがあることと思います。

一方で、指導の技術も含めて実際に取り組んでみて初めて納得のいくものもあることでしょう。研修会の意義もその辺にあるものと考えます。

これからも、様々な場面で応用ができるような研修会の企画を考えていきたいと思いますが、ご意見ご希望などがあれば、事務局までぜひお寄せ下さい。

昨年、「第１回　ジャパン　バードフェスティバル　2001」に、本会も初めて参加しました。とりあえず、これまでの活動について展示を中心にアピールしましたが、この経験を生かして、次回はそれなりの工夫を凝らしたいものと考えています。

今年行われる第２回について、打ち合わせと準備が既に進行しつつあります。今年も環境学習研究会と連絡を取り合いながら、愛鳥教育についてアピールしていきたいと考えています。

「もりまき通信」も16回目となりました。毎回、ユニークなテーマでご執筆いただいていますが、今回のテーマも興味深いものでした。

幅広い支持を得ている「となりのトトロ」ですが、個人的にも好きな作品の一つでした。しかし、これまで何回も繰り返し見てきてはいても、そこに描かれている自然の風景を観念的に眺めているだけであったことに気付かされました。今回、そういったことにも観察の目を向けることの意味を再確認することになり、著者の卓見に脱帽した次第です。

ずいぶん昔のことになりますが、小学校理科の教科書について、野鳥の記述に関する内容を調べたことがあります。すべての日本人が手にし、目にする教科書ですので、記述されたその内容が科学的に正確であることが求められるのはいうまでもないことです。

しかし、これが芸術性を帯びたものになると、その科学性をどこまで主張すべきかは、意見の分かれる場合も出てくるものと思います。

それでも、その背景に科学的な正確さを意識することの意味は、やはりあるのではないかと思います。

かねて私たちは、私たちが取り組んでいる愛鳥教育は、単に野鳥を愛玩する「愛鳥」ではないと主張してきました。自然観察に基づいた正確な知識や理解の上に立ってこそ、更に深い「愛鳥」の心が養われると訴えてきました。

これからも、広い視野視点から物事を見つめていきたいものと思います。

「四季旬報」は、副会長の渥美先生が長らく手掛けていらっしゃるものです。「旬報」ですので、その名の通り、毎月三回の発行ということで、それだけでも大変なものだと思います。これまでに執筆された量も膨大なものに上っています。

とりあえず、最近の号から選んでいただき、掲載することにしましたが、愛知県の自然だけでなく、渥美先生ならではの自然観察の方法や目の付け所を参考にしていただければと考えています。

村本義雄顧問の中国野性動物保護協会名誉理事への就任を心から御祝い申し上げるものです。本会としても、朱鷺の教材化などに取り組めるよう、準備を進めていきたいと考えています。

（染谷）

愛鳥教育 No.66

平成14(2002)年7月31日

発行人　杉浦嘉雄
発行所　全国愛鳥教育研究会
住　所　〒166-0012 東京都杉並区和田3－54－5
第10田中ビル3F
(財)日本鳥類保護連盟内
電　話　０３－５３７８－５６９１
ＦＡＸ　０３－５３７８－５６９３
会　費　３,０００円
郵便振替　００１８０－７－１２４４２
印刷所　祐　文　社